

調査報告

## 金沢大学総合日本語プログラムにおける 学習者のニーズ調査報告

峯 正志・深川 美帆<sup>注1</sup>

### 要 旨

金沢大学で学ぶ留学生がどのような目的で日本語を学んでいるか、どのような日本語教育を求めているかを明らかにするために、金沢大学に在籍する全ての留学生を対象に日本語学習に関するアンケート調査を行った。その結果、来日時点でさまざまな日本語力の学習者がいること、本学で学ぶ留学生は日本人とコミュニケーションができるようになることや日本や日本文化への興味関心から日本語を学んでいること、日本語学習を希望する学生のうち、日本語の授業に出席するのが難しい主な理由は専門の勉強との兼ね合いであること、留学生の背景によりできるようになりたいと考えている日本語のスキルに特徴があることがわかった。これらの結果を参考にし、より学習者のニーズに合った授業を提供できるよう、今後の総合日本語プログラムの改編を進めていく。

### I. はじめに

総合日本語プログラムは、金沢大学国際機構留学生センター<sup>注2</sup>が全学の留学生を対象に行っている日本語教育プログラムである。プログラム開始時から17年近くが経過したが、その間本学の留学生受入れ状況や、学習者の属性も変化してきており、提供する日本語教育の内容を見直し、コース改編の必要性が高まっていた。本報告では、なぜこのような改編をするに至ったかについての経緯を述べ、そして改編のための基礎資料とするために行ったニーズ調査の概要および結果について述べる<sup>注3</sup>。

## II. ニーズ調査の経緯

### 2.1 総合日本語プログラム概要

総合日本語プログラムは、1998年秋学期に新規開講された日本語プログラムである。この学期から金沢大学短期留学プログラム（略称 KUSEP）が始まり、これに対応するため、従来開講されていた日本語補講を大きく改編したものがこの総合日本語プログラムである。

それまでの金沢大学における日本語プログラムは、学習者の属性によりいくつかの別のプログラムに分かれていた。つまり、(1)研究留学生の予備教育としての日本語プログラム「日本語研修コース」、(2)日本語補講としての「全学向け日本語補講」、(3)学部留学生のための共通教育科目「日本語 B」の3つのプログラムである。新しく短期プログラム生（以下 KUSEP 生と略す）を受け入れるに当たりどのようなプログラムを開講するか検討したが、短期プログラムのための全く新しいプログラムを開講するには人的および財政的な余裕がなかったため、従来の日本語補講を拡大発展させていくことで対応することとなった。このため、本来ならばプログラムごとにそれぞれの学習目的やレベルに合ったコースをデザインするべきところを、結果として様々なニーズを持つ留学生が同じ教室で同じ内容の授業を受けるという、全く異なるニーズを持った学習者を同じ授業の中で抱えるプログラムになったのである<sup>14</sup>。

2010年度春学期からは金沢大学国際化戦略の一環として留学生数を大幅に増やすことになったため<sup>15</sup>、総合日本語プログラムは縮小路線から拡大路線に方向転換し、もともと多様であった受講生が更に増加、多様化することになった。

現在、総合日本語プログラムでは、(1)日本語補講として受講する全学の留学生、(2)学部留学生<sup>16</sup>、(3)日本語・日本文化研修プログラム生、(4)KUSEP 生、(5)日本語研修コース生、(6)日韓理工系学部留学生コース生、(7)セメスタープログラム生などを受け入れている。(1)および(2)以外の学生は、総合日本語プログラムでの日本語学習が必修となっている。またこれ以外にも、総合日本語プログラムでの学習が正規単位として認められる各部局所属の短期交換留学生も受講している。学生の背景が多様であるだけでなく、受講が必修となっている学生がクラスに混在していることが更にプログラムの運営を難しくしているのは上述の通りである。

### 2.2 ニーズ調査の必要性

総合日本語プログラムは、上述のように1998年秋学期に開講され、これまでにクラス編成や使用教材は副教材等については随時見直し<sup>17</sup>がなされてきたが、主教材や授業

の内容、進め方についてはプログラム開始当時からほとんど変わっていなかった。しかしながら、本学の留学生受入れ状況や、学習者の属性も変化してきており、提供する日本語教育の内容を見直し、コース改編の必要性が高まっていた。

その1つが、2010年度からの留学生数増加である。従来1クラスは平均10名強のクラスサイズであったものが20名を超えるクラスも出てきたため、クラス編成、授業内容、進め方なども再考の必要が出てきた。また、来日時の学習者の日本語レベルもプログラム開始時とは変わってきており、より学習者のレベルと学習目的に合った教育が提供できるようにする必要に迫られていた<sup>167</sup>。これらの理由から、改編は喫緊の課題となっていた。

そこで2012年度より、中・上級の教材の見直しも含めた、コースの改編を開始することにした。まずはコーディネーターと授業担当者間で、代替の教科書案、およびコースの目標、コースシラバスなどの案を立てた。しかし、これはあくまで教える側の視点に立ったものであり、真に学習者の求めている教育がどのようなものかを知る手がかりが必要であった。そこで、学習者にアンケート調査を実施することにした。その際、現在受講している学生だけでなく、何らかの理由で今は受講してはいない学生の意見も聞く必要があるのではないかと考え、全学の留学生を対象とした調査を行うことにした。

以下の章で、そのアンケートの概要と結果を述べる。

### Ⅲ. アンケート調査について

#### 3.1 アンケート調査の概要

アンケートは金沢大学に在籍する留学生（482名、2012年4月1日時点の数）を対象に行った。アンケート用紙の配布数は482、回収数は246であり、回収率は51.04%であった。

アンケート調査紙面は日本語と英語を併記して作成し配布した。アンケートは2012年7月上旬に配布し、7月下旬に回収した。

アンケートの構成は3つから成り、1) 学習者についての質問（プロフィール）、2) 総合日本語プログラムについて、3) 日本語学習の目的・ニーズについて、である。1) 学習者についての質問では、属性に関する質問、渡日前の日本語学習歴、在籍期間について質問し、本学で学ぶ留学生の一般的な情報を得ることを目的とした。2) 総合日本語プログラムについては、総合日本語プログラムの受講の有無をたずね、受講したことがある学習者に対しては、履修した科目、出席状況、出席があまりできな

い学習者にはその理由、総合日本語プログラムへの満足度をたずねた。受講したことが一度もない学習者については、受講しなかった理由、受講の意志、開講時間や開講場所についての要望をたずねた。3) 学習者の日本語学習の目的・ニーズについては、日本語学習の主な目的と、話す・聞く、聞く、書く、読むなどの技能別にどのような場面で日本語の必要度が高いかをたずねた。また、総合日本語プログラムのeラーニングの利用状況とeラーニングで学びたいことについてたずねた。

回答方法は、質問に対してあてはまる項目を選んで回答する選択式を取った。プログラムに対する満足度は6点法のリカートスケール法を取った。スキル別の日本語学習のニーズについては「特にできるようになりたい」「できるようになりたい」「選択しない」のいずれかから選んでもらった。そのほか、プログラムに対する意見や要望などは記入式で回答してもらった。留学生からの記述式回答欄で特に言語の指定はしなかったが、回答は英語または日本語で記入されていた。但し、このアンケート調査に回答した留学生全員がすべての項目に回答したわけではない。したがって、回答者数は質問によって異なっていること、回答者によっては一部だけ回答した場合があることを断っておく。

表1 所属別人数

	所属	人数
短期	留学生センターなど <sup>118)</sup>	35
文系	人間社会学域	28
	人間社会環境研究	27
	教育学研究科	4
	法務研究科 (法科大学院)	0
理系	理工学域	15
	自然科学研究科	83
医薬系	医薬保健学域	6
	医薬保健学総合研究科	32
	医薬保健学総合研究科 (創薬科学・薬学専攻)	7
	医薬保健学総合研究科 (保健科学専攻)	7
	計	244

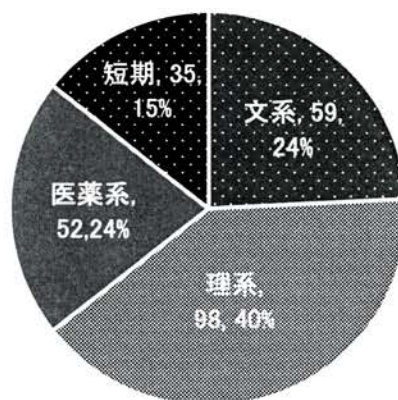


図1 所属 (文理医短別)

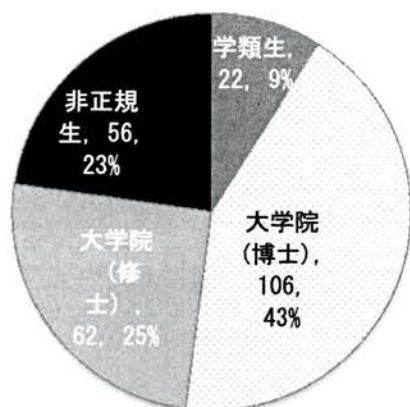


図2 身分

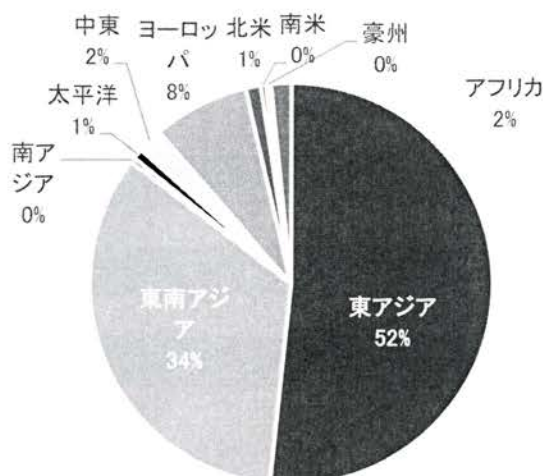


図3 出身国・地域

## 3.2 アンケート調査結果

### 3.2.1 回答者のプロフィール

本調査の回答者の所属は、表1のとおりである。所属を文系、理系、医薬系および海外の協定校からの短期交換留学生（以下、「短期」と記す）別に見ると、理系の学生が40%、医学系の学生が21%、文系が25%、短期交換留学生が15%を占めている。これは実際の全学の留学生の割合を反映しているといえる。身分別でみると（図2）、大学院の正規生が全体の68%を占めており、続いて短期交換留学生、研究生などの非正規生が23%、学類生が9パーセントと続く。年齢は20～25歳が100名、26～30歳が82名、31～35歳が35、36～40歳が22名、40～45歳が6名であり、20代がその大半を占める。男性と女性が占める割合は男性が113名、女性が132名でほぼ同数である。出身国・地域別で見ると（図3）、最も多いのが中国で104名、次に東南アジアのベトナムが29名、インドネシア25名、次に韓国が13名と続く。その他、ヨーロッパ（19名）、中東（5名）、北米（3名）、アフリカ（4名）、豪州、南米、太平洋州（各1名）からの学生もおり、これもほぼ全学の留学生の割合に対応する。

金沢大学に来る前の日本語学習歴についてたずねたところ、日本語を全く勉強せずに来日する人が59人、半年以下が57人、半年から1年が17人と半数近くを占める。一方、1年以上国で勉強してから来日する学生も半数近くにのぼる。これについて、回答者の所属分野別に見たのが図4である。これを見ると、理系、医薬系の学類・研究科に所属する学生は日本語をほとんど学習せずに来日する学習者が多くを占める。一方、文系の学類・研究科では2年以上の学習歴がある学生が半数を占めている。また、海



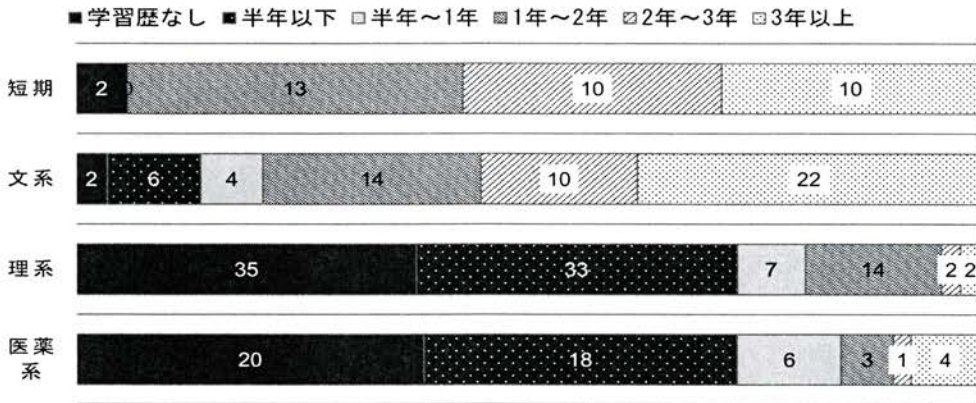


図4 渡日前の日本語学習期間（文理医短別）

外の協定校からの短期交換留学生は、既習歴のある学習者が大半を占め、ほとんどが1年以上の学習歴を経て本学に留学している。これらのことから、本学には来日時点で様々なレベルの学習者がいることがわかる。また、これからの在籍予定としては、留学生センター所属の学生は半年以内と回答しているが、正規学生は1年～2年の在籍予定と回答している学習者が多い。

### 3.2.2 総合日本語プログラムについての回答

総合日本語プログラムの受講の有無についてたずねたところ、回答者246名中217名(88.2%)が受講したことがあると回答している。このことからわかるように、本調査の回答者のほとんどは、総合日本語プログラムの受講歴がある学生であることを断っておく。

#### 3.2.2.1 出席状況について

<受講歴がある学生について>

受講歴がある学生のうち、今学期受講していると回答したのは135名であり、その出席状況についてたずねたところ、「ほぼ毎回出席」が43.0%、「たいてい出席」が27.4%と約70%にのぼり、「あまり出席していない」が13.3%、「ほとんど出席していない」が14.0%、「登録はしたが一度も出席していない」が2.2%であった。「あまり出席していない」「ほとんど出席していない」「登録はしたが一度も出席していない」は合わせて40名いたが、その理由をたずねたところ、「専門の勉強で忙しくて日本語を勉強する時間がなかった」が30人、「専門の授業と日本語の授業の時間が重なって出られなかった」が9人と、専門の勉強が多忙であることを理由に挙げる学生がほとんどであった。その他には、「レベルが合わない」「内容が合わない」がそれぞれ2人、その他が3人であった。レベルと内容が合わないと回答した学習者の理由は、先学期までに最上級レベル

のクラスをほぼすべて受講していることから、今学期はその学習者が学習したいと思うクラスがなかったためと考えられる。もう1名は、先学期ビジネス日本語を受講していたが、今学期は就職活動のため出ることができなかったと回答している。その他と回答した学習者の理由記述には、「the learning method is too fast, it is difficult for me to follow the lesson 9」とあることから、総合初級クラスに登録したものの、コースの学習進度についていくことができず、出席しなくなったと考えられる。

同様に過去の出席状況についてたずねたところ、「ほぼ毎回出席」が51.4%、「たいてい出席」が34.6%と85.9%にのぼり、「あまり出席していない」が10.3%、「ほとんど出席してない」が3.2%、「登録はしたが一度も出席していない」が0.5%であった。「あまり出席していない」「ほとんど出席していない」「登録したが一度も出席していない」は合わせて26名いたが、その理由をたずねたところ、「専門の勉強で忙しくて日本語を勉強する時間がなかった」が21人、「専門の授業と日本語の授業の時間が重なって出られなかった」が14人と、専門の勉強が多忙であることを理由に挙げる学生がほとんどであった。その他には、「レベルが合わない」が4人、「内容が合わない」が2人、その他が1人であった。これらの結果から、日本語クラスに履修登録しながら、授業に出席しない理由のほとんどは、専門が忙しく、日本語の授業に出ることができないためであることがわかった。

#### <受講歴がない学生について>

全学的には日本語の授業を履修したことがない学習者はもっと多くいるはずであるが、今回の調査では246人中29人と、ごく少数からしか回答を得ることができなかった。しかしながら、普段聞くことができない貴重な意見として分析した。受講したことがないと回答した学生のうち23名が、日本語力の自己評価を「日本語で研究や勉強ができる（上級レベル）」と回答した学生であった。中級（日常生活一般のことが日本語でできる）が9名、初級後半（身の回りの簡単なことはわかる）が5名、初級前半（あいさつや簡単な表現がわかる）8名、ゼロ初級（日本語がまったくわからない）が2名だった。

次に、受講しない理由（複数回答可）をたずねたところ、「日本語が不要」と答えたのは2名のみ（理系2名、うち上級1名、ゼロ初級1名）であった。また、「日本語力が十分にあるのでクラスをとる必要がなかったから」が6人（いずれも上級レベル）であった。また、「総合日本語プログラムについての情報を知らなかったから」という回答も5人あり、これはいずれも上級レベルの学習者であった。

受講しない理由として多かったのは、「専門の勉強で忙しくて日本語を勉強する時間がないから」が最も多く23人、続いて「専門の授業と日本語の授業の時間が重なって

履修できないから」が17人であった。その他には、「日本語の授業をしている教室が遠いから」が6人、「コースのレベルと自分のレベルが合わないから」が5人であった。また、「総合日本語プログラム以外で学んでいるから」が3人あり、うち2人は週末に地域の日本語教室で習っているとのことだった。

以上のことから、これまでに受講したことのない学生においても、日本語の授業を履修しない一番の理由は、専門の研究や授業との兼ね合いで日本語学習に時間を割けないことであることがわかった。

### 3.2.2.2 受講目的・満足度

総合日本語プログラムを受講したことがある学生217名に対して、受講する目的（複数回答可）についてたずねたところ、「日本語がもっと上手になりたいから」が172人と最も多く、これはどの所属グループの学習者においても圧倒的に多かった。次に、「自分の今の日本語力を維持したいから」67人、「単位取得のために必要だから」が51人、「留学生と友だちになりたいから」が47人、その他が23人であり、回答者が日本語科目を履修する最も大きな理由は日本語力の向上であることがわかった。その他と回答した学習者の、具体的な目的（記述回答、任意）には、「日本で就職したいと考えているため」（3人）、「日常生活に必要なため」（3人）、「子どもの保育園や小学校の先生とコミュニケーションをするため」（1人）、「日本人を理解するため、日本人と友達になるため」（2人）といった回答があった。

次に、総合日本語プログラムに対する満足度について、6点法のリカートスケール法でたずねたところ、「6：とても満足している」が41人、「5：満足している」が100人、「4：どちらかといえば満足している」が62人と、全体の93.6%が総合日本語プログラムに対して満足していることがわかった。満足／不満足の原因をたずねたところ、「6：とても満足している」「5：満足している」「4：どちらかといえば満足している」は、「授業の内容」「教師の教え方」「教科書の内容」「クラスの数」「週あたりの授業回数」「開講時間」「開講場所」と、選択肢のすべてが理由として関係があると回答していた。一方、「3：どちらかといえば満足していない」「2：満足していない」「1：全く満足していない」と回答した学習者は合わせて14名だったが、不満足の原因としては、開講場所や開講時間、週あたりの授業時間よりも、授業の内容や教科書の内容が不満足の原因により関係があるという傾向が見られた。

### 3.2.3 日本語学習の目的

本学で学ぶ留学生が日本語を学習する目的はなにかを明らかにするために、回答者全員に対して日本語学習の目的についてたずねた。次頁表2にある8項目のうち重要なものから順に1番目から5番目まで順位を付けて選んでもらい、順位の高いものか



表2 日本語学習の目的（文理医短別）

		全体 N=246	文系 N=59	理系 N=98	医薬系 N=52	短期 N=35	
日常生活（買い物、手続きなど）のため	平均 SD	1.87 1.69	1.85 1.89	1.76 1.41	1.69 1.62	2.49 2.05	
日本人（友だちや学外の人とコミュニケーションをするため）	平均 SD	2.36 1.58	2.92 1.85	2.32 1.32	1.87 1.59	2.20 1.49	**
大学の研究や勉強で先生や学生とコミュニケーションをする上で必要	平均 SD	2.07 1.52	2.24 1.30	2.00 1.44	2.00 1.72	2.14 1.83	
大学で勉強や研究をするのに必要だから	平均 SD	1.71 1.71	1.72 1.38	1.97 1.90	1.39 1.74	1.37 1.57	
単位を取るために必要だから	平均 SD	0.96 1.69	0.88 1.60	0.84 1.73	1.19 1.62	1.14 1.88	
大学卒業後に日本語を使って仕事や研究をするときに必要だから	平均 SD	1.35 1.70	1.71 1.55	1.13 1.70	1.14 1.79	1.63 1.75	
日本社会や日本語、日本文化に興味があるから	平均 SD	2.20 1.83	2.29 1.97	2.22 1.81	2.23 1.77	2.09 1.74	
特に目的はない	平均 SD	0.39 1.27	0.09 0.54	0.54 1.48	0.58 1.56	0.23 0.97	

ANOVA \*\*p<0.01

ら5, 4, 3, 2, 1, 0点（0点は選択なし）として集計し、それぞれの項目の平均値を出した。

この結果から、日本語学習の目的は、学内、学外の人とのコミュニケーションと日本社会や日本語、日本文化への興味が主な目的であることがわかる。文理医短のグループ別にみると、理系は全体的傾向と同様に学内、学外の人と日本語でコミュニケーションのためと、日本社会や日本語、日本文化への興味が高い。文系は、全体的傾向の2つに加え、大学の研究や勉強で周囲の人とコミュニケーションをするためが高い。医薬系は日本社会や日本語、日本文化への興味が高く、次が大学の研究や勉強で周囲の人とコミュニケーションをするためが高い。さらに、文理医短のグループ間で有意な差があるかを分析した結果、「日本人とコミュニケーションをするため」について、文系と医薬系の間で有意な差が認められた。短期は、日常生活のためが最も高く、続いて学内、学外の人とのコミュニケーション、次に日本社会や日本語、日本文化への興味が高い。

### 3.2.2.3 技能別ニーズおよび学習目標

次に、日本語を使ってどんなことができるようになりたいと思っているか、学習者の日本語学習のニーズを知るため、本学の留学生が大学生活を送る上で必要と思われる

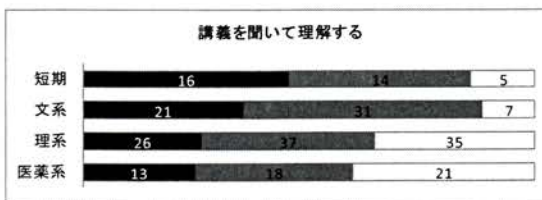
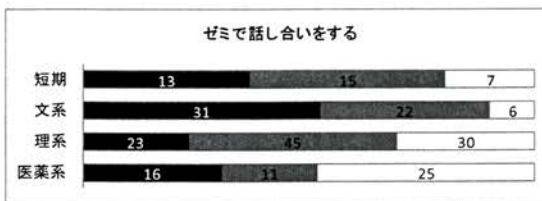
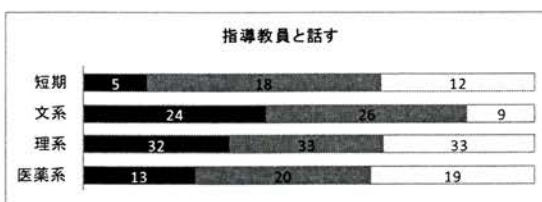
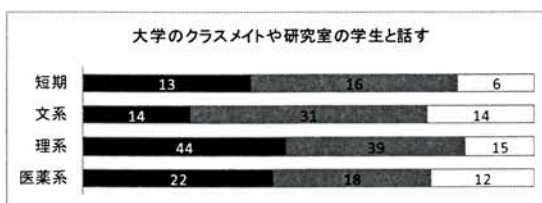
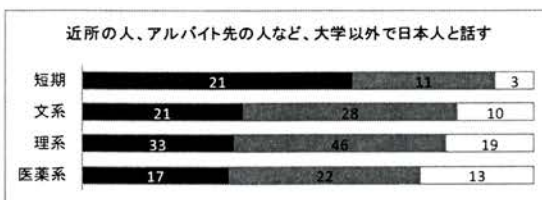
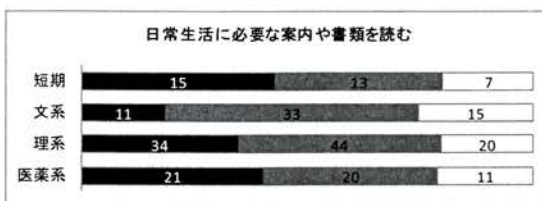
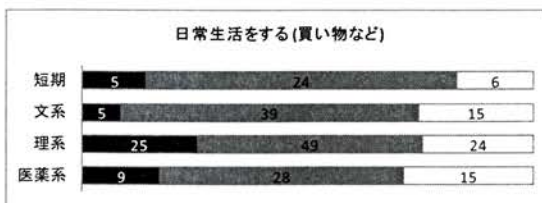
表3 日本語でできるようになりたいこと（技能別）

技能	場面	文系 (N=59)			理系 (N=98)			医薬系 (N=52)			短期留学生 (N=35)		
		特に できるよう に	なり たい よう に	選 択 な し	特に できるよう に	なり たい よう に	選 択 な し	特に できるよう に	なり たい よう に	選 択 な し	特に できるよう に	なり たい よう に	選 択 な し
話す・聞く	日常生活をする（買い物など）	5	39	15	25	49	24	9	28	15	5	24	6
	近所のアルバイトの人など、大学以外で日本人と話す	21	28	10	33	46	19	17	22	13	21	11	3
	大学のクラスメイトや研究室の学生と話す	14	31	14	44	39	15	22	18	12	13	16	6
	大学の事務員と話す	4	33	22	26	36	36	11	19	22	2	25	8
	指導教官と話す	24	26	9	32	33	33	13	20	19	5	18	12
	ゼミで話し合いをする	31	22	6	23	45	30	16	11	25	13	15	7
	学会などで発表する	24	13	22	24	31	43	10	16	26	14	6	15
	その他	0	0	59	4	0	94	0	0	52	2	1	32
聞く	講義を聞いて理解する	21	31	7	26	37	35	13	18	21	16	14	5
	授業や実験で先生の指示を聞いて理解する	23	30	6	34	39	25	20	11	21	12	16	7
	ゼミや演習で発表を聞いて理解する	24	25	10	39	36	23	18	18	16	12	10	13
	学会などで発表を聞いて理解する	18	27	14	26	35	37	14	15	23	10	10	15
	日本語のテレビや映画を見て理解する	18	27	14	22	43	33	13	21	18	21	12	2
	その他	0	3	0	2	1	0	0	0	0	1	0	0
書く	日常生活に必要な書類を書く	14	31	14	23	49	26	18	20	14	13	16	6
	大学生生活に必要な書類を書く	15	34	10	16	50	32	13	13	26	13	13	9
	手紙やeメールを書く	11	27	21	20	38	40	7	17	28	17	14	4
	授業の課題やノートを書く	11	34	13	9	28	55	4	14	33	10	20	6
	研究論文を書く	35	18	5	18	18	62	6	15	31	10	11	14
	発表のレジュメ資料を書く	22	25	11	15	18	65	8	11	33	3	13	19
	学会のプレゼンテーション資料を書く	20	21	17	16	21	61	8	14	30	5	12	18
	その他	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
読む	日常生活に必要な案内や書類を読む	11	33	15	34	44	20	21	20	11	15	13	7
	大学生生活に必要な案内や書類を読む	9	35	15	31	43	24	11	21	20	11	14	10
	メールを読む	12	30	17	30	34	34	12	18	22	16	14	5
	授業で先生が黒板に書いたことを読む	11	27	21	20	27	51	9	12	31	9	15	11
	授業のテキストや配布された資料を読む	14	28	17	23	27	48	10	13	29	12	15	8
	専門の論文や本を読む	35	19	5	21	29	48	11	13	28	11	10	14
	日本語の本（一般書）を読む	23	25	11	12	39	47	6	21	25	23	10	2
	日本語のウェブサイト（ニュースなど）を見る	10	32	17	13	34	51	7	16	29	16	12	7
	その他	0	2	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0

る行動を4技能に分けて提示し、その中から、「日本語で特にできるようになりたいこと」「日本語でできるようになりたいこと」を複数回答で選んでもらった。「特にできるようになりたいこと」を2、「できるようになりたいこと」を1、選択なしを0として集計した結果が表3である。

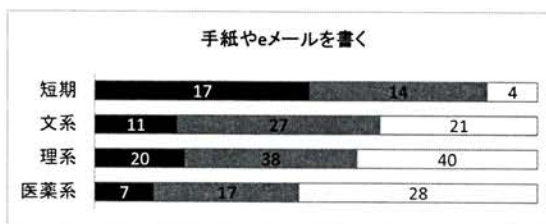
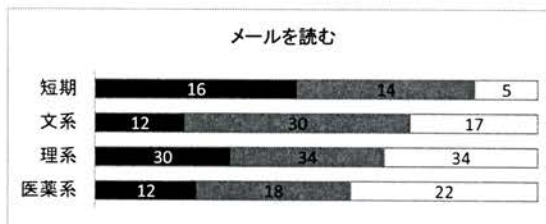
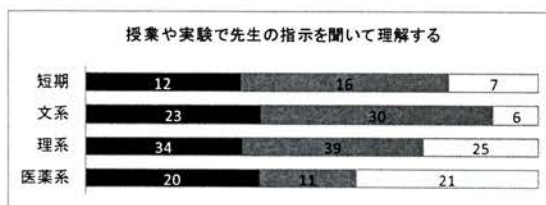
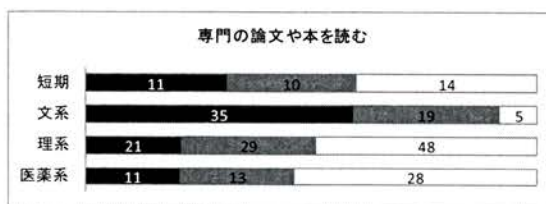
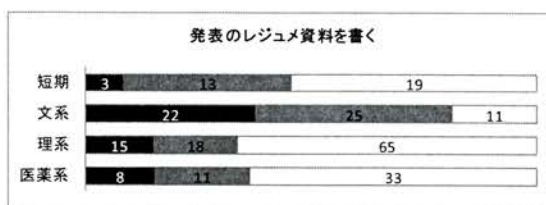
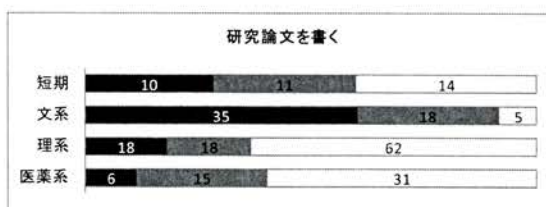
この結果から、どのグループにおいてもできるようになりたいと選んだ項目が多かったものは、大学内外の自分の身近な人々と聞いたり話したりのやりとりができるようになることであった。また、日常生活において必要な案内や書類を読んだり書いたりすることもすべての所属の学生に必要とされていることがわかった。特に、「授業や実験で先生の指示を聞いて理解する」「ゼミや演習で発表を聞いて理解する」といった項目についても、いずれの所属の学生も選択しており、必要と感じていることがわかった。日本語による授業が多い文系や短期プログラムの学生はもちろん、研究指導などは英語で主に行われているとされている理系、医薬系の学生にとっても、研究室や授業、ゼミでは日本語が理解できるようになりたいと考える学生が多いことが明らかになった。

次に、所属別に見ていくと、文系



は、日本語による授業や研究指導が行われていることから、必要とされるスキルとしては、上述の項目に加え、「講義を聞いて理解する」「ゼミで話し合いをする」「指導教官と話す」など、研究や学習を行う場面において日本語でのやりとりができるようになりたいと思っていることがわかった。特に、「研究論文を書く」「専門の論文や本を読む」「発表のレジュメ資料を書く」といったスキルは他の所属の学生に比べても際立って高くまた必要度も高いことがわかった。理系・医薬系では、文系や短期留学生のように際立って必要度が高い行動はないが、「授業や実験で先生の指示を聞いて理解する」「ゼミや演習で発表を聞いて理解する」「日常生活に必要な案内や書類を読む」といった項目の必要度が比較的高かった。中でも理系では「大学のクラスメイトや研究室の学生と話す」という項目が他の所属と比べて高く、研究室内で日本語でのコミュニケーションの必要性を感じていることがわかった。

短期留学生は、所属するプログラムのカリキュラムの性質上、日本語の授業が必修になっていること、また選択科目にも日本語による授業が多いことから、講義を理解する、教師の指示がわかる、授業の課題やノートを書く、といっ



た教室場面で必要とされている日本語の技能が高い。それに加えて特徴的なのは、「日本語のテレビや映画を見て理解する」「手紙やeメールを書く」「日本語の本（一般書）を読む」「メールを読む」「日本語のウェブサイト（ニュースなど）を見る」といった、日本語でのコミュニケーションや、日本についての一般的な興味関心を満たすために必要な日本語力を4技能にわたって必要としていることが明らかになった。

以上のことから、文系、理・医系、短期留学生の間には、大きな点では共通する項目も多い中、それぞれの背景により異なるニーズがあるこ

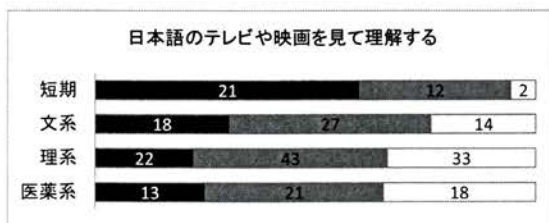
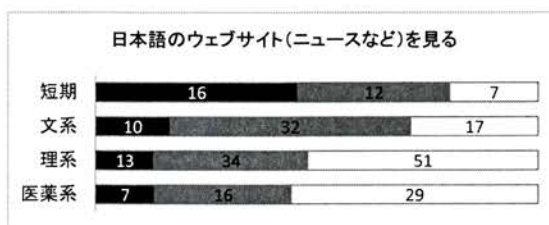
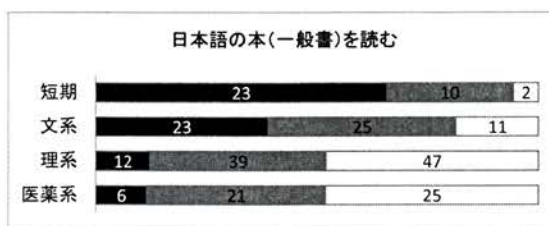
とがわかった。文系の学生では、研究や学習場面において「書く」「読む」といったスキルの習得への希望が特に高いことが本調査でも改めて示された。理系・医薬系の学生にとっては、研究室内でのコミュニケーションに必要な日本語、および、日常生活を一人でも遂行できるようになるための日本語、また、短期留学生は他の正規学生に比べ、日本人とのコミュニケーションに関するスキルや日本理解のための受容に必要な日本語スキルの習得への希望が特に高いことが明らかになった。

#### IV. まとめと今後の展望

以上、全学アンケート調査の結果から、本学の留学生のプロフィール、および彼らの日本語学習の目的やニーズについて考察した。これらのことをまとめると、以下のことが言える。

##### 1) 来日時点での日本語レベル

理系の学生には日本語を学ばずに来る学生が多く、文系と短期留学生の多くは既に日本語を学び中級、上級になってから来日する学生が多いことがわかった。





## 2) 総合日本語プログラムの履修状況とプログラムへの満足度

受講している多くの学生が現在のプログラムに満足しているが、専門で忙しい学生は受講が難しい。同様に、現在受講していない学生や過去に受講した経験のない学生は、日本語を学びたいという希望はあるものの、専門が忙しくて思うように受講できないことがわかった。

## 3) 日本語学習の目的

本学で学ぶ学生の主な目的としては、周囲の人間とのコミュニケーションができるようになること、日本や日本社会への理解のために日本語を学びたいと考えていることがわかった。また、学習者の属性によって、日本語でできるようになりたいことに特徴があることがわかった。理系・医薬系では、日常生活に必要な日本語と、特に研究や学習場面において日本語によるコミュニケーションができるようになることを望んでいることがわかった。また、文系では、特に大学の授業や研究においては日本語が中心であり、特にアカデミック場面での日本語のスキルが4技能にわたって必要であることがわかった。短期留学生は大学内外の人々とのコミュニケーション、そして日本社会や日本文化理解のために4技能にわたる日本語能力を高めたいと考えていることがわかった。

以上の結果を踏まえ、今後、総合日本語プログラムをより学生の実情とニーズに合ったものにしていくには、以下の方策が考えられる。

一つは、専門で忙しい学生が日本語学習できるようにするための環境づくりである。そのためには従来提供してきたクラスの週当たりの開講コマ数や開講時限を見直すことや専門が忙しい学生でも履修可能なクラスのデザインが必要である。これについては、総合日本語プログラムでは、2012年度秋学期から、専門が忙しい理工系学習者のための初級日本語クラスを理工系の建物内で開講している。現在5期目を終えたところであるが、毎学期授業内容を見直ししながら改良を重ねているところで、次第に従来の初級クラスの授業回数や進度に合わない学習者にとって適したカリキュラムができつつある。しかしながら、実際には専門を優先するために学習が続けられない学生もまだまだ少なくないことから、専門分野の教員へも日本語学習の必要性を理解してもらい、学生が日本において円滑に学業と生活を行える環境を両者で連携して築いていく必要があると思われる。また、専門で忙しい学生が授業に出て日本語を学ぶ以外の方法として、eラーニングの有効な活用なども考えられる。総合日本語プログラムでは2011年春学期から、日本語科目受講生向けのインターネットを利用したコースマネジメントシステム「e-IJLP」を開設し、教材の配布や宿題の提出、添削などを行っているが、今後はこのシステムを活用し、授業に来られない学生のために自学自習を



支援できるようなサイトも充実させていく予定である。

もう一つは、多様なレベル、目的を持つ学習者にとってより有益な日本語教育の提供である。今回の調査から、属性によって来日時の日本語レベルにも違いがあること、また、短期プログラムの交換留学生と正規学生、そして専門分野によって、求める日本語のスキルに違いがあることが明らかになった。これについては、2014年春学期から、特に文系の上級レベルの学生を対象としたアカデミック・ライティングのクラスを増設するとともに、上級レベルの技能別クラスの内容やクラス編成の見直しを行って改編を進めているところである。このように、より学習者の属性を考慮してニーズにあったクラスを提供するとともに、異なる属性の学習者が混在している現在のコースデザインについても、同時に再検討してゆく必要があると思われる。

本学の留学生数は今後ますます増加していくと予想されるが<sup>1</sup>、本学の留学生受け入れ政策を見据えつつ、多様化する学習者のレベルとニーズに合ったコースデザインが今後一層必要になってくることは明らかである。

今回の調査結果を、今後の総合日本語プログラムのコースデザインおよびカリキュラムデザインに生かし、本学の留学生にとってより充実した日本語教育を提供していくつもりである。

#### 【謝辞】

全学アンケートの実施に際してご協力くださった本学の教員、職員の皆様、そして回答してくださった留学生の皆様にご心より御礼申し上げます。

#### 【注】

- 1 金沢大学国際機構留学生センター（総合日本語プログラム コーディネーター）
- 2 平成24年度より、金沢大学留学生センターは、金沢大学に新たに組織された国際機構に所属することになり、金沢大学国際機構留学生センターとしてスタートした。
- 3 本稿は結果の一部に考察を加えたものである。調査の全結果およびアンケート項目については、本調査の結果をまとめた報告書『金沢大学における留学生の日本語学習に関する全学アンケート調査報告書』を参照されたい。
- 4 総合日本語プログラムの具体的な運営については、峯・長野（2010）を参照のこと
- 5 2009年秋学期までは350名程度であった留学生が<sup>2</sup>、2010年春学期から491名に増加した。その後も留学生数は現在に至るまで約500名を推移している。
- 6 学部留学生も総合日本語プログラムを受講可能だが<sup>3</sup>、現実には、卒業単位として認定される、共通教育科目「言語科目「日本語 B」」として開講されている一部の技能別クラスだけを受講している学生がほとんどである。
- 7 例えば、KUSEP生はこれまでプレイメントテストで初中級～中級にプレイスされる例が多かったが、最近では上級にプレイスされる学習者も増えてきた。また、これまでそれほど多くなかった中級、上級

のクラスでは、人数の面でもレベル設定の面でもこれまでの枠組みでは収容しきれなくなってきた。

- 8 「留学生センター等」には、留学生センター所属の短期留学プログラム生（KUSEP,日研,日本語研修コース,セメスタープログラム）に加え、部局所属の短期留学プログラム生（一般短期および各部局の半年から1年の短期留学プログラム）も含めた。

**【参考文献】**

1. 金沢大学国際機構留学生センター総合日本語プログラム（2015）『金沢大学における留学生の日本語学習に関する全学アンケート調査報告書』金沢大学国際機構留学生センター
2. 峯正志・長野ゆり（2010）「留学生センター『総合日本語コース』の日本語教育—チームティーチングによるコース運営を中心として—」『金沢大学留学生センター紀要』第13号 p.45-54

# **A Learner Needs Analysis for the Japanese Language Courses at the Integrated Japanese Language Program of Kanazawa University**

Masashi Mine and Miho Fukagawa

## **Abstract**

This paper reports on the results of a questionnaire survey that was conducted by the Kanazawa University International Student Center in July 2012 for all the international students studying at Kanazawa University. The purposes of the survey were to discover 1) what students really expect from the Integrated Japanese Language Program (IJLP) and 2) what Japanese language skills students need for academic settings. The following are the main findings: 1) The students came to Japan with different levels of Japanese ranging from elementary to advanced, 2) The main reasons students study the Japanese language are to be able to communicate with teachers and friends and to better understand Japan and Japanese culture, 3) The main reason students do not attend Japanese classes is that they are too busy with their specialized study, 4) Their field of study is relevant to the language skills that they wish to acquire. The results will be taken into consideration for revision of the program.

**[Keywords]** needs analysis, Japanese language learning, international students, questionnaire